

アイルランドへようこそ

(アランセーターとの出会い)

辺見 最近、日本でもセント・パトリック・デーやハロウィーンなど、アイルランドに関わりのあるイベントが話題になっています。

野沢さんは、日本でも有名なアランセーターを扱つていらっしゃいますが、きっかけは何だったのでしょうか。

野沢 ひょんな縁というか、東京でアランセーターを扱うおじいさんに出会ってしまったのが始まりです。

パドレイグ・オシオコンという弁護士のおじいさんで、八〇年代、アイルランドファッショの展示会を見に行つたら、そこにそのおじいさんがいて、アランセーターがあつた。アランセーターって聞いたことはあったのですが、本物がまさかあるとは思わなかつたし、いまだに残つているとは知りませんでした。

そのおじいさんが本を広げながら、学者のように「ニューグレンジ（アイルランド・ミース州にある巨大遺跡）の模様とセーターの模様には関

連性があつて」みたいな話を始めたんです。

松島 それは興味をそそられますね。

野沢 そのうち、オシオコンさんの輸入の仕事を手伝うようになり、パートナーミーみたいな形でアイルランドのアランセーターを輸入するようになったのですが、それから間もなくしてオシオコンさんは亡くなつてしまつた。何か遺言を残されたみたいを感じで使命感を覚えたのです。その後もアランセーターの輸入を

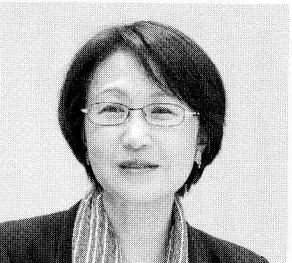
辺見葉子
野澤弥一郎
松島まり乃



野澤弥一郎 (株)ジャック野澤屋代表取締役。慶應義塾大学法学部法律学科卒業。静岡市にて洋品店「ジャックノザワヤ」を経営。著書に『アイルランド/アランセーターの伝説』。



松島まり乃 シアタージャーナリスト、旅行作家。慶應義塾大学文学部卒業後、出版社を経てフリーに。ミュージカル、紀行文など幅広く執筆。著書に『アイルランド 旅と音楽』『アイルランド民話紀行』等。



辺見葉子 慶應義塾大学文学部教授。慶應義塾大学大学院英文学専攻博士課程修了。UCLA大学院民俗学・神話学専攻で修士号取得。専門は中世文学、ケルト神話、妖精伝承。

続けていて、アイルランドのファッショや雑貨などと一緒に扱つています。毎年一月にダブリンの展示会に行つて、渡航歴というか、往復だけは二十回以上やつていて、が、住んだこともないし、ゆっくり滞在したことも実はないんです。

松島 野澤さんのお店は、もともとイギリスのオーダースーツを扱つていらつしやつたのですよね。

野沢 うちもヴァン・ジャケットから始まつた店で、ちよつと大人向けのイギリスのオーダーミたいな形の

店をつくるうと思つて、「セヴィルロウ俱樂部」という名前を付けました。普段はイギリスの国旗を店に出していますが、心情的にはかなりアイリッシュハートです（笑）。

辺見 雑貨はどんなものを扱われているのですか。

野沢 今はあまり多くないので昔はクラダリング (Claddagh Ring) とかケルトのジュエリーなどもやつたことはあります。

辺見 最近は、ニューイギリスの、

クラフトやジュエリーなど新しいアーティストさんもたくさん出ていますね。

野沢 ええ、昔のアイリッシュクラフトというと、どこか野暮つたくて、素朴で田舎っぽいものが多かつたですが、クラダのハートみたいなものをうまくアレンジしながら、とても洗練されたものが増えてます。

辺見 言語、風土、音楽、民話への関心

辺見 私をアイルランドに導いたのは、トールキンの『指輪物語』です。

『指輪物語』から中世英文学へ、そこからさらにケルト語文学の世界へと興味が広がりました。中世ロマンス、例えばアーサー王物語などに登場する妖精や異界など、私が心惹かれる要素がアイルランドやウェールズなどケルト語圏とつながるものだと知り、またトールキンのエルフ（妖精）のルーツは中世アイルランドの神話伝承に描かれる神族トゥアタ・デー・ダナンにあると知つて、ケルト語の神話伝承を勉強したいと思うようになりました。



的なケルト美術展が開催されたり、エンヤが音楽を担当したBBCの「ケルト人」というドキュメンタリー・シリーズが放映されたり、ケルトームが起きましたね。

松島 当時はアイリッシュダンスのショー『リバーダンス』などのおかげで日本でもアイルランドが大いに注目されました。最近はメディアの注目度はそれほどではありませんが、アイルランドはもともと、八世紀のヴァイキング侵攻に始まって英國支配や大飢饉と、大変厳しい歴史を経て、力強く生き残っている国です。経済も盛り返してきているし、二〇一五年には同性婚を世界初の国民投票で合法化するなど、社会の平和化の面で先進性を見せてもいます。世界が混迷を深める中で、この国の来し方と豊かな文化は私たち日本人にも大きなヒントを与えてくれるのではないでしょうか。改めてアイルランドブームを起こせないものか、いろいろと考えているところです。

（「溺死者を判別する」セーター）

辺見 野沢さんが手がけていらっしゃるアランセーターとは、どんな出来があ

留学したUCLAの大学院には神話学・フォークロア学の専攻があり、そこでケルト語の神話伝承と中世ウェールズ語を学びました。そのあと慶應から二年間ケンブリッジ大学に留学させていただいて、念願の古アイルランド語を学ぶ機会も得ました。信じられないほど複雑で難しい言葉でしたが。その二年間には、現代アイルランド語も学ぼうとアイルランドにも何回か足を運びました。

野沢 どのあたりに行かれましたか。

辺見 アメリッシュ・ゲーリックがまだ日常語として使われている、いわゆるゲールタハトのサマースクールに行きました。一回は北部のドニ

ゴール、あと二回は西部のコネマラです。一ヵ月ぐらいずつの滞在でした。本当にアイルランドの風土も言葉の響きも人も、みんな温かくで。ドニゴールもコネマラも、またいつか行きたいです。

松島 私とアイルランドの出会いは音楽です。高校生のときにアメリカのチャート番組でU2というアイリッシュ・バンドを知り、ほぼ同時期のレコードが当たりました。エンヤが所属していたバンドなのです。が、当時は彼らのことは何も知らず、英語の勉強になるかなと思つて応募したんですね。ところが、レコード針を落としてみたら、英語からは程遠い、むにやむにや、ほわーとした

アイルランド語の響きに衝撃を受けました。

辺見 不思議な、でも美しい響きの言葉だと思われたのでしょうか。

松島 その響きが気になつたまま、大学卒業後、出版社に入り、「マリ・クレール」という女性誌の編集部に配属されました。

当時、一人の編集者が一国の特集を担当していて、私ははじめ英国を、ちこちを巡り、いろいろな方にお話を伺う中で、彼らの音楽の根底にはオーラル・トラディション（口承文化）があることに気づき、民話や神話の世界にも興味が広がつて行つたのです。ますますアイルランド熱が高まりまして（笑）会社を辞め、執筆したのが『アイルランド民話紀行』の二冊です。

辺見 日本でも一九九八年には大々

るのでしょうか。

野沢 よく「フィッシュヤーマンセータ」と言われることもあるのです

が、実はそうではありません。

アラン諸島はゴールウェー湾の沖、十数キロのところにあります。神秘的なイメージで語らますが、絶海の孤島ではありません。日本人や中国人の観光客もたくさん来ています。

辺見 私もサマースクールの仲間

と、三つ並んでいるアラン諸島の真ん中の島イニシユ・マアーンに、家族とは一番大きなイニシユ・モアに行きました。やはり断崖絶壁に築かれたダン・アンガスの砦の遺跡から眺めた大西洋の絶景は忘れられません。まさにこの世の崖っぷち、エッジという感覚で。こうした「ケルト」より遙か昔の古代の石の遺跡や墳墓は、妖精や異界と通じるトポスとも見なされていて、私にはこの上なく魅力的です。野沢さんのご興味とは大分方向性が違いますが（笑）。

野沢 ここにスコットランドの漁業

基地があつて、漁民がたくさん来ていて、そこでは普通の紺色のガンジーセーターが編まれていました。

アラン島は劇作家ジョン・M・シンゲの時代から名が知られていて、その人は編み物の天才だったので、ボストンで習った編み物のことをアラン島の人たちにどんどん教えていった。

そうしたら、だんだん凝つたセーターが出てきてしまつて、紺色の普通のセーターに、いろいろな柄が入ってきたわけです。

辺見 野沢さんが実際に着ていらつしやるセーターは、真っ白で、前後左右、袖、すべて柄が違っていますね。

野沢 そうなんです。これを設計図なしに編みます。

松島 白という色にも意味があるのですか？

野沢 教会では、堅信礼（コンファ

メーション）という儀式があります。

十二歳のときに行う元服式みたいなものです。そこでは、男の子が白衣のセーターを母親に編んでもらって、それを着て教会に臨みます。

島の言い伝えで、男の子は十二歳までは、悪魔にさらわれてしまうから女の子の格好をしなさいと言われていたんです。それで十二歳までは男の子も女の子の格好をしていました。

十二歳の堅信礼から初めて男の子の格好ができるという大切な儀式なので、そのときに白いセーターを母親が編んで着せた。とても大切なセーターだったのです。

松島 それが一般に広まつていつたわけですね。

野沢 一九二〇年代ぐらいに、アイルランドを研究していた人がこの白いセーターに目をつけました。「これ、大人のセーターとして編んだら売り物になるんじゃない？」といふことで、商品にしていったわけです。

辺見 ということは、比較的新しい

ものなのですね。

野沢 アイルランドは王様がいないので、ブランドがなかなか育たないのですが、アラン島というのは数少ないブランド力のある土地だった。そこから出てきたセーターということです。

辺見 漁師さんが着るものとは違うで、注目を浴びたということですね。

野沢 本当の漁師が着ているのは、紺の普通のセーターで、濡れるとウエットスーツみたいにパツパツに縮んで水を通さないようになります。

そこから、「セーターが溺死者の身元照会になる」という伝説が生まれました。

実はこれは少し眉唾な話で、シンギーの戯曲が元ネタです。『海に騎りゆく者たち』という作品なのですが、溺死者の靴下が流れ着いて、「ああ、これは私が編んだ靴下よ」というシン

ーンがラストにあります。

一九五〇年代、アメリカへセーターホールドを売り込んでいくとき、靴下より

セーターのほうがインパクトがある、ということで、「溺死者を判別するファッショニ」というふうにアレンジされて、盛んにPRされたのがアランセーターというわけです。

人恋しさ、人懐っこさ

野沢 最近はイギリス経由でアイルランドに入るということが多くなりました。僕はほとんどイスタンブール経由ですね。

松島 そうなんですか。

野沢 ええ、日本はユーラシア大陸の東の端で、アイルランドは西の端。そしてイスタンブールがちょうど大陸と大陸の中間で、大陸のつなぎ目にあるような感じで面白いです。

野沢 ら格安のライアン・エアを使つていましたが、値段も距離感もバス感覚ですね。

野沢 スタンステッドは僕も使つたことがあります。

辺見 ウェールズのホーリー・ヘッドからフェリーでもすぐですし、距離的には本当に近いのに、水でもイギリスは硬水なのにアイルランドは軟水とか、いろいろと違いますよね。

松島 何が違うと言つて、やはり「人」が違いますよね。

野沢 例えばロンドンのシティあたりでパブに入ると、常連さんたちの冷やかな視線が痛い（笑）。でもアイルランドでパブに入ると、好奇心いっぱいの視線に包れます。そしてはじめは黙つているけど、英語が通じる相手とわかると、楽しそうに話しかけてくれます。

野沢 アイルランドの人って、何か期待されていることを期待されるとおりにしゃべってくれるところがあるように思います。

松島 話をどんどん続けようとしてくれますね。人懐っこさや人恋しさがある。今、目の前にいる人との一期一会を大切にする人たちです。

野沢 そうそう。それで、あいつ知つ

「ケルト」概念の難しさ

松島 ひとつのブームのおかげで、アイルランドと言えば「ケルトの国」、ローマ帝国に追われたケルト民族が辿り着いた最果ての国、というイメージが強いようです。

辺見 「ケルト」という用語は、最近学問の世界ではとても扱いが厄介なんですね。「ケルト」と言うと、古代のヨーロッパ大陸にいた、ギリシ

ア・ローマの著述家たちが北方の蛮

族として描いた人々から、現代のアイルランド、スコットランド、ウェールズ、ブルターニュといったケルト諸語圏の人々までひつくるめて、何か神秘的なヴェールで包んでしまう。「ケルティシズム」と言うんですが、このようなロマンティックなイメージが問題視されるのが一つ。

それから「ケルト」という「民族」とか「人種」が存在するわけではないのに、誤解を招くのはまずいといふのも一つ。包括概念としての「ケルト」というのは、十八世紀の比較言語学の発見によって、つまり近代になつて作られた、あくまでも言語学上の概念だという認識です。ですから、「ケルティック」という呼称は言語に関してのみ使うべきである、そして十九世紀末の「ケルティシズム」の産物である神秘的・ロマンティックというイメージとは決別すべし、というのが現在のケルト学研究での潮流なんです。ただ、アメリカでは必ずしもそうではなくて。

いてくれる人が周りにいない。記憶を失わないよう、馬に語っているんだ、と聞いたことがあります。それなら、せめて私だけでもお聞きしますといつて書き留め、後で紀行記事に盛り込んでいたんですね。

そうしたら一年、彼の姪御さんを名乗る方から連絡があつて、彼が亡くなつた。遺品の中に彼の写真入りの本があつて、どうやらあなたが書いた本らしいが、どういう内容ですか、という問い合わせでした。彼の物語りに言及した章を英訳してみると、叔父さんが物語りにそんな思い入れを持つていたなんて知らなかつた、ありがとうとお返事がありました。

辺見 感動的なエピソードですね。

松島 ところが、その話には続しがありました。しばらくして、またその姪御さんから、彼の生涯をまとめで YouTube にアップしたの連絡があつたのですが、その映像を

ト諸語圏の人々までひつくるめて、何か神秘的なヴェールで包んでしまう。「ケルティシズム」と言うんですが、このようなロマンティックなイメージが問題視されるのが一つ。それから「ケルト」という「民族」とか「人種」が存在するわけではないのに、誤解を招くのはまずいといふのも一つ。包括概念としての「ケルト」というのは、十八世紀の比較言語学の発見によって、つまり近代になつて作られた、あくまでも言語学上の概念だという認識です。ですから、「ケルティック」という呼称は言語に関してのみ使うべきである、そして十九世紀末の「ケルティシズム」の産物である神秘的・ロマンティックというイメージとは決別すべし、というのが現在のケルト学研究での潮流なんです。ただ、アメリカでは必ずしもそうではなくて。

辺見 以前、アイルランドの人には、「スコットランドの人と同じケルト人としての親近感を感じますか?」と聞いてみたら、「まさか! 彼らはブリティッシュだ。全然感じない」と言われました。
野沢 アイルランドの人人がイングランドを悪く言うのはよくあります。が、たしかにスコットランドのことでもあまりよく言わない。

観てみたら、物語り活動についての言及が無いまま終わっていたんですね。親戚の方々からしてみれば、彼の人生において物語りというのは重要な要素ではなかつた、ということなのでしょう。

でも、そんな中で、外国人の私人だけでも、彼の語りや物語に対する思いを聞き、文字に残すことができよかつたのかなと思うんですね。むしろ、相手が外国人だったからこそ、彼も本音を言えた部分もあつたかもしれない。

もしかしたらこうした、そのままでは誰にも聞かれないまま消えてゆく物語はたくさんあるのかもしれません。これからも現地に行つたら、なるべく多くの方から物語をうかがいたいと思っています。

辺見 十九世紀に産業革命が進行する中、民話や口承文化の伝統が廃れてしまうのではないかという危機感を抱いて、失われる前に採集し記録しなくてはと献身的に動いた人たち

松島 アメリカとイギリスでは、ケルトという言葉の受容が異なるのです。

辺見 そうなんです。UCLA とケルトリッジの違いにはカルチャーショックを受けました。イギリスもですが、アイルランドやウェールズなどケルト諸語圏では特に「ケルト」と十把一絡げにされることを嫌う傾向があるようです。

野沢 それは、アイルランドが弱い国から強い国になつてきて、アイデンティティも強くなってきたということもあるのだろうと思います。
辺見 以前、アイルランドの人には、ケルト人としての親近感を持たないこともあって、アイルランドではオーラル・トラディションが盛んでしたが、テレビの普及以降、衰退つつある現状があります。
以前、ベルファストで出会ったアマチュアの語り部の方から、私はたくさんのお話を持つていて、聞いていました。私は実際のフィールドワークはしたことはないのですが、ダブリンのユニバーシティ・コレッジにあるフォーカロア・コレクションへは調査に行つたことがあります。アイルランド各地から集められたその膨大な資料が物語る、フォークロア保存への情熱に圧倒されました。
最近のフォークロア研究では、口承文化と文字文化の相互作用や影響関係などに注目する傾向がありますが、やはりフォークロアの担い手、語り手（ストーリーテラー）の存在も忘れてはいけないと感じます。

松島 親や祖父母、近所の人々から聞いたお話を耳で覚えるなかで、彼らは驚異的な記憶力を發揮します。親の側も、子供が自分の物語と一字一句同じに物語れることをとても誇

りにしていますね。

地方差も面白いですよ。北部では長い物語、西部ではキリスト教の信仰心篤い物語が多く語られますが、東部では短い笑い話が好まれる傾向があつたりします。

（アメリカとの関係）

野沢 アイルランドにとって、イギリスが重要な国であるのはもちろんですが、もう一つアメリカという国もすごく大事ですよね。

大西洋を隔ててはいますが、お隣の国であり、アイルランドはアメリカの母国である、みたいな認識もあります。「アメリカには四千万人のアイリッシュがいる」という言い方もありますね。アメリカとの関係はどうなのでしょうか。

松島 アイルランドからアメリカに渡った人のほうが、よりナショナルティックというか、アイルランド愛は強いような気がします。

例えばアイリッシュダンスの世界

で、世界大会で上位に食い込んでくるのはアメリカのチャンピオンが多い。子供のころから親が「あなたはアイルランド人だから」とアイル

ンドの伝統樂器やダンスを学ばせている例は多いそうです。

辺見 そうですね。もちろんアイル

ンド語のサマースクールなども、アイルランドでは学校の先生の資格

取得にアイルランド人もたくさんいるというアイルランド人もたくさんいます。

私はアメリカ人です。ルーツがアイル

ランドにある人たちですね。

アイルランド人の私の友人が「アメリカに親戚のいないアイルランド人なんていないよ」と言っていますが、アメリカでは今もアイリッシュ・コミュニティの結束は強いみた

いです。

地理的に離れていると、そういう民族的なアイデンティティがかえつて強まるようで、アイルランドの独立戦争のとき、資金を提供したのは

アイルランド系のアメリカ人でした。アイリッシュ・ミュージックのファンだつて、アメリカには本当に多いですものね。

松島 アイルランドではほとんどの人が樂器を嗜むので音楽を仕事にするのは大変ですが、ミュージシャンはアメリカがあるから食べてゆけると言われます。広い国をあちこちツアーダラスからですね。

辺見 アイルランドで国技とされるハーリングやゲーリック・フットボ

ールは、ホッケー やサッカーミたいだけれどそうじゃない、なんか減茶苦茶なようにも見えるのですが

（笑）、とても面白いですよね。

松島 テレビで見たことがあります。試合がテレビの画面に収まりきらないほどダイナミックで、しばしばボールがどこにあるのか、見えなくなる（笑）。

野沢 ちょうどこの六月、静岡にラ

（引き分け）の美学

辺見 アイルランドで国技とされるハーリングやゲーリック・フットボールは、ホッケー やサッカーミたいだけれどそうじゃない、なんか減茶苦茶なようにも見えるのですが（笑）、とても面白いですよね。

野沢 たしかに協調性はありますよ

本人に聞いても、そういうことはよくあるそうです。本音では大嫌いな人とも、親友のように付き合えるといふのはすごいですよね。

そのとき、沖縄の方々が非常に華々しく歌や演奏をアピールしていく、コンペのような様相を呈したんですね。それに対してモイアが、セッションというのはシェアリング（共有）なのであって、勝ち負けを競うようなものじゃない、とこぼしていました。こうしたシェアリングの感覚は、音楽に限らずアイルランド人の根底にあるように感じます。

野沢 たしかに協調性はありますよ

本人に聞いても、そういうことはよくあるそうです。本音では大嫌いな人とも、親友のように付き合えるといふのはすごいですね。

（強くなつたアイルランド）

松島 野沢さんは二十年以上前からアイルランドに行かれているそうですが、当初とこの頃では、変化を感じになりますか？

野沢 ずいぶん変わつたと思いま

す。最初行つたのが九二、三年。当

時アイルランドはヨーロッパのお荷物みたいな扱いで、日本はまだバブル景気の余韻で勢いがありましたね。

あと、リップサービスかもしれない

で、日本人は結構アイル

ド人から好かれているなど感じまし

た。田舎のほうへ行くと「お前ら、よ

くイギリスと戦争してくれたな」と。

辺見 小さな国なのによくやつた

ケビーのアイルランド代表チームがやってきました。二〇一九年の日本でのワールドカップに向けて、これから盛り上がりしていくんじゃないでしょうか。日本とアイルランドは同じ組になりました。

辺見 アイルランドのラグビーはどんな感じなのでしょうか。

野沢 戰い方も、何というか武骨なんです。勇敢ですが、決してクレバーではない（笑）。とにかく前へ、前へという戦い方です。

アイルランドにとっては、引き分けは勝ちと同じなんですね。引き分けの美学みたいなものがある。司馬遼太郎さんも「街道をゆく愛蘭士紀行」の中で、「アイルランド人は、客観的には百敗の民である。が、主觀的には不敗だと思っている」と書いています。

松島 勝ち負けにこだわらないのはたしかにそうかもしれません。沖縄エンヤのお姉さんであるモイア・ブ

長年アイルランドに住んでいる日

な、みたいな（笑）。

野沢 その後、日本は景気が悪くなつてきて、アイルランドは「ケルティック・タイガー」（九〇年代半ばから二〇〇〇年代半ばにかけての急速な経済成長）がありました。不動産バルが弾けたりましたが、この二十年間で、アイルランドの人たちは、自分たちが先進国の仲間入りをしたと思つていてるんじゃないでしょうか。

そして、完全に日本のほうが下になつてて、いう感じはします。そのぐらい、アイルランド人は強くなつた。商売についても、いろいろ言ってくるようになつたなど感じます。辺見 イギリスがEUを離脱すると、影響は大きいでしょうか。

野沢 そう思います。これからイギリスとのつながりが逆に弱くなつていくように思います。これは、アイルランドにはいいことなのではないか。アイルランドはEUの主な国の中で、唯一英語が公用語の国になる

わけで、これは大変なアドバンテイジです。その意味でも、イギリスのEU離脱をうまく利用できるのではないかという気がしています。

松島 ケルティック・タイガーのあと、アイルランドの人たちの気質が、いいなと思つてちょっと心配だったのですが、國のほうもそれは意識していく、「クリエイティブ・アイルランド」という制度のもと、アーティストに対し、例えば作品を売ったときの所得税は免除したりします。アーティスト自体も減ってはないし、創造的なマインドが失われていないというのを聞いて、ちょつと安堵しています。

日本人の琴線に触れる

松島 アイルランドのミュージシャンに、「日本のお客様はとてもアイルランドを愛してくれているのが伝わるんだけど、どうして僕らの国が好きなの？」と聞かれることがあります。

以前、エンヤに取材した際にこの話になつて、アイルランドと日本はこんなに離れているのに、どうしてこれほど類似しているのか、旅人が伝えたのかしらね、と二人ですかりマンに浸つてしましました。

辺見 民話のモチーフの普遍性や類

日本にも伝統的に「この世は仮の宿」という意識があつて、そうした、世界に対する「謙虚さ」が共通しているのかもしれません。

野沢 それ、僕も聞いたことがあります。あと、「I - my - me - mine」の「mine」がない。だから、This is mineではなく、This belongs to meなどの言い方をするみたいですね。それぐらい、いわゆる所有欲がない。だから、国を独占しようといふ王様も出てこない。貴族も、豪族もいない。それでイギリスにやられっぱなしでしたわけです。

丸山 薫さんは昭和二年に有名な「アイルランドのよな田舎に行こう」という詩を書いていますね。丸山さんはアイルランドには行つたことがないのに、「アイルランドのよな田舎」と書いた。イギリスと違つて貴族のいない、田舎のアイルランド、庶民のアイルランドといううのに、日本人はシンパシーを抱くんじゃないでしようか。

松島 アイルランド語で「have」に相当する言葉はないと言われますね。代わりに、「何々は私とともにある」とか「どこそこの上にある」という言い方をして、「私が所有している」とは言わない。これは、すべては神様から与えられた一時的なものであるからという考え方があると聞いたことがあるのですが、これも日本人には親しみやすい感覚ですね。

その意味で、日本人にとって、アイルランドは興味を持ちやすいだろうし、入り口はいろいろあると思うのです。音楽もそうだし、民話もうだし。僕みたいにセーターから入る人はなかなかいませんが（笑）。

松島 ちょっと興味を持つたら、とりあえず旅してみるのもいいかもしれません。人、文化、遺跡に大自然と、どれをとっても底無しの魅力がある国です。

辺見 アイルランド語は（ウェールズ語など他のケルト諸語もそうです）が、慶應大学では学ぶ場があります。マイノリティ言語ですから仕方ないといえばそれまでのですが、慶應でもいくつかアイルランド語をはじめケルト諸語が学べるようになつたらいいなと夢見ていました。少數言語だからこそ、今日集まつた三人の思いとしては「アイルランドだからこそ」でしようか、そこから見えてくる世界は限りなく面白いと思うのです。

ります。なぜ日本人はアイルランドが好きなのだと思われますか？

辺見 音楽について言えば、よく言わることですが、一種の郷愁、切ないような懐かしさを感じる日本

人の琴線に触れる旋律なのではないでしょうか。オスカー・ワイルドの母親のワイルド夫人によれば、そういう切なく美しい旋律は「妖精の音楽」の特徴だそうです。

松島 日本の八百万神的な、自然との距離感の近さはあるのかなと思います。例えばアイルランドの民話には、「鶴の恩返し」に似た、あざらしと人間が交わる物語も、「ティル・ナ・ノーグ」という、「浦島太郎」によく似た物語もあります。